

一茶全集

第6卷 句文集・撰集・書簡

丸山一彦 小林計一郎校注

一茶全集／第六卷

句文集・撰集・書簡

昭和五十一年十一月三十日発行

校注 丸山一彦

小林計一郎

編集 信濃教育会

長野市旭町

発行所 信濃毎日新聞社

長野市南県町六五七
電話(〇三〇)四二五
振替 長野 一二〇

印刷 信毎書籍印刷株式会社
長野市西和田四七〇

定価 四八〇〇円

魂の饑を飢ひつゝも心なたを
 何とぞ思ふれそ彼は富き那知とも
 果は犬走も虎を食ふやめくふふれ
 とおのきく水の噴きくまゝ世を
 ろくみ人をそくみまゝあはれ世を
 地獄のくろくみまゝあはれ世を
 さくらんばけきく籠山の聖人ふか
 こそく此御座をいふなと日夜を
 こよこそく此御座をいふなと日夜を
 のまの所とて春の娘より入来
 人なくおかぬとて春の娘より入来
 文化七年三月日
 志の玉と春首欣一茶書

有施康海と云ふ者、この上野の邊を去る
ぬる下つ不便な門前の家、いゝて成
一合もいゝ買ひ、いゝ萱蒲のちをいゝち
りさやうて、仲弓宜候をいゝ所にも始
て、其うち本まゝいゝ花をさうていゝ
まゝいゝ心まつていゝて、其のいゝる
かゝりもいゝの柄、色さういゝ花をいゝ跡、
長ういゝとわまつていゝ農工商各いゝ
あゝの種、いゝいゝのいゝ

未可也 罪より罰に合ふ一茶

[illegible]

下路田唄
あれもさう筑紫の所横きよこその下り初うしろり

One of the most

をかゝつて大突を凌ぎ春宵に賞を
 紙帳を引張つて眠るを防ぎて人
 くのかゝつて春宵の春をさぐりぬ
 人並の正月にのみあそびて一茶
 借るの事を思ふよもの下のやんや
 格致のやんややんやのきこひ 菊又
 秋のやんやとて水の月をさつるの君も仰
 るとなつてたあゝとのおの君も仰
 首危のうき木をさつてて日影もつ
 るや けふもあゝ 甲子く 雲色くも
 片ふ折心のきこひやんやとていさ
 ら望望のやんやとていさとていさ
 ようんととていさとていさとていさ
 かけくも 生涯をさつるもな
 春のやんやとていさとていさ 主格
 を智のやんやとていさとていさ
 新

世中の松よ柳よ人よ春

文化十年正月一日信濃玉柏原一茶認

阿茶の任せし所をいひしる

目おなまもちし位にちる春一茶
そこの五月にききしる娘ふ

一人おの親貴膳をいひ
遠へ安へふふなるをいひしる

文正二年正月一日

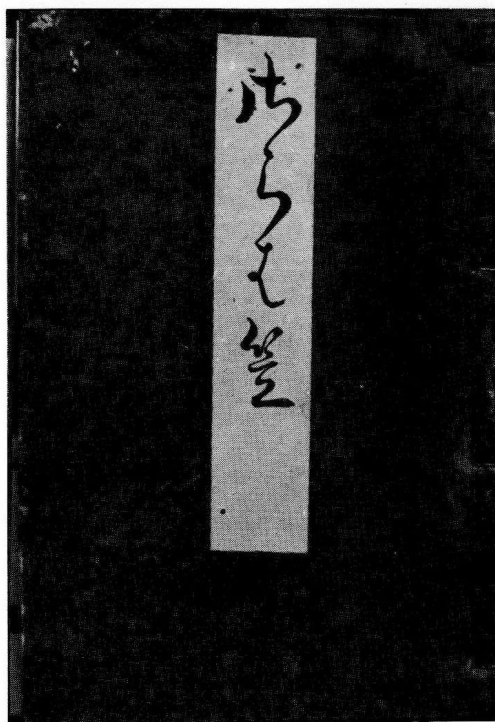
く盗心はあらず持たざるを以て
可なりと作し色くを仙中に不及は
るも仙はあらず人海に是則當流
の安心とて中し宛なり

カ十七
かぐもあらず任せのそへ茶

文正二年十二月廿九日

親書と人
隔えん地獄掩ふ日
きりば只一念のしは

『ざらば笠』の表紙



『三韓人』の巻尾

八月廿二日安身まゐるにふて草の
 落つとちてきたるちておのち
 かきあつてお書とてふれうあ
 世つておとれやうそちうよう
 せう

此次の家才徳と信島 一茶
 大のふとてくくわてきたるち
 とちてきたるちのちのち

文政十一年八月十九日

編後 一韓人 未三月刻

信州株諸寺一茶

江戸使所

小樽島町三丁目寺本寺守静方

寛政十年・二川あて書簡

文政十年・春耕あて書簡

『句稿消息』の一節 薄字の部分は
夏目成美が朱を入れたところ

十二月廿四日吉瑞入

校上、土

是、アノツビの栖、雪立尺

工

かぢやくと雪ころも在り

Handwritten signature: *Wm. H. H. H. H.*

皆之系猪賣家の角田川

上
卷

節孝人七尺五寸小女五寸

上

日月如梭
張定

松上

かん界の天の集む

其子侯者い新、其子也

第六卷／句文集・撰集・書簡

目次

解説		五
凡 例		九
句文集		二
我春集		三
株 番		四
志多良		五
おらが春		三
まん六の春		七
撰 集		一七
たびしうゐ		一八
さらば笠		二〇
三韓人		二五

堇 艸……………二四三

木槿集……………二五七

あとまつり……………二七一

杖の竹……………二六九

たねおろし……………三〇五

書 簡……………三三三

句稿消息……………四三三

索引……………四七七

句歌索引……………四七九

書簡索引……………四八九

解説

本全集の第六巻として、句文集・撰集・書簡を収めた。初めに、これらの各編についてその概要を説明しておく。

句文集

本編には、一茶の手に成った句文集として、『我春集』（文化八年稿）、『株番』（文化九・十一年稿）、『志多良』（文化十年稿）、『おらが春』（文政二年稿）、『まん六の春』（文政五年稿）の五部を収めた。いずれも元旦から歳末に至る一年間の随想・見聞に自他の発句・連句を書き列ねた句文集の体裁をとっているが、生前に刊行されることもなく、稿本のままで門弟の間に伝来されたものである。ことに代表作『おらが春』などは、刊行の意図もあったらしく、清記して挿絵なども用意したが、遂に果たさず、没後二十五年を経て、嘉永五年に門人の手でようやく出版されるという有様であった。

本編では、一茶の自筆稿本に拠って正確な本文の掲出に努め、欄外注記や拘点・丸点の類もそのままに記し、できる限り原本の面影を伝えるようにしたが、『志多良』だけは原本の所在不明のため、荻原井泉水氏の校訂本（昭和十二年刊）に拠った。また『まん六の春』は首尾を欠き、一年間の手記としての体裁を備えていないが、そのままに掲出した。

これらの句文集に収める一茶の文章は、いずれも文化後期以降の円熟期に属し、軽妙自在な文体に、的確な描写、個

性的な表現を豊かに含む好文章が多い。これを初期の『寛政三年紀行』や『父の終焉日記』（ともに第五卷所収）などの文章と読み比べてみるとおもしろい。

撰 集

本編には、一茶自身の手になった撰集として、『たびしうゐ』（寛政七年刊）、『さらば笠』（寛政十年刊）、『三韓人』（文化十一年刊）の三部と、さらに門人たちの名で出版された『葦艸』（春甫編・文化七年刊）、『木槿集』（魚淵編・文化十年刊）、『あとまつり』（魚淵編・文化十三年刊）、『杖の竹』（松宇編・文化十四年刊か）、『たねおろし』（素鏡編・文化九年刊）の五部を収めた。

『たびしうゐ』と『さらば笠』は、青年期の西国行脚時代の集で、一茶の処女撰集とも言うべきものであり、『三韓人』は、郷里帰住を決意した一茶が、江戸俳壇引退の記念集として上梓したもので、それぞれ一茶の俳歴上重要な意味をもつ撰集である。

『葦艸』以下の五部は、名目上は門人編となっているが、いずれも一茶の代撰もしくは後見によるものである。江戸在住時代から、一茶は帰郷のたびに北信各地を歩いて地盤の開拓や門人の獲得に努め、長沼を始めとして、六川・高井野・浅野・中野・湯田中・野尻などに、有力な一茶社中がつぎつぎに形成された。これら一連の撰集はその成果を示すもので、郷里に根をおろした一茶及びその一門の俳諧活動の実態を知ることができる。

本編では、それぞれ刊本に拠って校訂の正確を期したが、『さらば笠』には戸谷本・柳原本の二種があり、『三韓人』にも初刷本・後刷本の別があるので、それぞれその異同を注記した。また『たねおろし』の場合は一茶の自筆稿本が現存するので、これも刊本との異同を注した。